

# 飛躍への決断

企業には、大きく飛躍を遂げる時がある。その際には、経営者による緻密な現状把握と将来予測に基づいた決断があった。

Vol.30

## (株)大和鉄工所



### 水門づくりからの多角化 切り札はコーヒー焙煎機

「清らかな川の流れ 水と共に人は生きる 夢を語り夢を育てる 大和鉄工所」思わず口をついて出るCMソング。岡山市東区金岡西町に本社を構える大和鉄工所は、水門製造を主力とするメーカーとして県内外の行政・民間からの注文に応えてきた。しかし、先細りする公共事業への依存脱却に向け悪戦苦闘する中、同社が選択したものは意外にもコーヒーの焙煎機だった。「水門」と「焙煎機」、この関連性のない分野に挑戦した背景にはどのような物語があったのか。



同社が製造した「マイスター焙煎機」。焙煎精度の高さとカフェの店先にあっても調和するデザインが好評だ



▲高度経済成長期から同社の発展を支えてきた水門事業。県内はもとより中四国・関西でも設計・施工している



▲春と秋の年二回行われる西大寺レトロマルシェの一角に置かれた焙煎機。当マルシェは地域活性化を目標に安井久社長の発案で始まった

### 水門メーカーとして

昭和24年、初代社長の安井千加太氏は現在の岡山市北区厚生町で「大和鉄工所」を開業し、主に農機具部品の加工・製造を行っていた。創業からほどなくして、現在の主力事業である水門の製造・据付を手掛けるようになったところから業容が安定し、昭和29年には株式会社へと組織変更した。その後、高度経済成長の中、全国各地で公共工事が強化されたことから需要が増大し、会社は急激な成長を遂げた。

しかし、千加太氏は好調な中であつても、会社が持続的に発展するためには公共工事への依存体質から脱却し、民間からの需要が期待できる今一つの柱が必要だと考えていた。そこで、うどん製麺機の開発や立休駐車場の施工を手掛けてみたものの振るわず、そんな折、昭和48年に始まったオイルショックのために公共工事が激減、本業の事業が低迷し他分野への挑戦は頓挫した。

その当時、大学生だった二代目の安井久氏は会社経営に関して興味を抱き、卒業後すぐに入社し施工現場や総務・財務などで経験を積んだ。そして昭和59年、39歳で大和鉄工所の代表取締役就任するや、「減反政策で水田の水門が減って先行きを楽観視できない以上、新たな収入の柱は必要」と先代社長と同じ考えに至り、経営の多角化への挑戦を再び開始する。

### コーヒー焙煎機への参入

新しい事業案を全社に募ってみたところ、ある社員から「コーヒー焙煎機を作ってみてどうか」との思いもよらぬ意見が寄せられた。それを発案した社員が大学の焙煎機を写真に取め、岡山から東京の有名珈琲店「バツハコーヒー」に持参、店主である田口護氏と面談し、ものづくりにかける情熱を伝えたことがきっかけとなった。その思いに共感した田口氏から、その場で次世代の焙煎機開発の依頼を受けたという。

社内でユニークな人材とアイデアを見出した久社長、「これも何かの縁だ」と、日本を代表する焙煎士である田口氏と意見を交換し、コーヒー文化のさらなる普及に協力するために共同開発することとなった。

コーヒー豆の焙煎は、環境の変化や日々の天候の影響をうけるため、釜の温度を一定に保てるように断熱カバーを二重構造にするなど工夫し、環境に左右されにくい安定した焙煎がおこなえる製品の設計に取り組んだ。



▶大和鉄工所二代目社長の安井久氏。会社の技術力を最大限に活かすべく焙煎機や自動防水扉などの製造に果敢に挑戦を続けてきた

今までの水門に関する製品開発とは勝手が違ったが、味をつくる機械の開発は同社にとって素晴らしい経験となった。社員の粘り強い試行錯誤を経て、平成14年「マイスター焙煎機シリーズ」が完成、販売代理店としてパートナーであるバツハコーヒーが販売を開始する。

焙煎機は、バツハコーヒーが主催するトレーニングセンターに設置され、同センターで開催される焙煎セミナーにて同機で焙煎実習を行っている。また毎年開催されている日本最大級のコーヒーに関する展示会SCAJ(日本スペシャルティコーヒー協会主催)への製品出展を今年も予定しており、11回目の出展となる。

販売台数は着実に推移しており、新商品開発の現場から新たなサービス提供の場まで、製品の性能品質ともに好評を得ている。飲料メーカー、調理の専門学校、ご近所のカフェまで、幅広いユーザーに選ばれ必要とされる製品であり続けるため、製品の付加価値向上に余念がない。現在、関東圏を中心に北海道から沖縄まで全国各地に納入している同社。コーヒー焙煎機の製品開発によって同社の知名度や企業イメージは格段に向上した。

※(株)バツハコーヒー代表で日本スペシャルティコーヒー協会の三代目会長。平成12年に開催された沖縄サミットでは各国首脳に同氏のコーヒーが振る舞われた。

### 中国への製品輸出

現在、同社はバツハコーヒーがサポートしている中国の顧客に対して製品を輸出している。今、中国はお茶文化から

コーヒー文化への過渡期にあり、都市部を中心に全土で需要が急増している。バツハコーヒーがサポートするのは、レアアース採掘のために荒廃した山岳地帯の環境を保護し、同地域に住む少数民族の生活を支援しながら森林を再生させるプロジェクト。

「中国で生産される素晴らしいコーヒー豆の焙煎工程を通じて、少しでも環境保護に貢献することが重要。製品輸出による課題は多くあるが、それら乗り越えることで、更なる展開が待っている」と安井社長。

また、焙煎機の用途はコーヒーにとどまらず、蕎麦の実や海産物などの食品加工にも需要が見込まれる。今後も機器の改良を続け、新たな分野に向けた製品の開発に「攻めの姿勢」を重要視する同社。これからは社員の可能性を信じ、自社の可能性を最大限発揮できる分野を求め飛躍する。



本社 岡山市東区金岡西町1108-2  
事業内容 水門、除塵機、橋梁、コーヒー焙煎機、その他鋼構造物  
代表者 安井久  
創業 昭和24年 資本金 4,800万円